

近松浄瑠璃『本朝三国志』第五段目の演出について

——人形・舞台・語りを中心に——

高 永 珍

はじめに

『本朝三国志』（享保四（一七一九）年二月、大坂竹本座初演）は、近松門左衛門作の後期時代浄瑠璃である。本作の一段から三段は、本能寺の変を素材に、春長光秀久吉の戦国の世が「お通」やその父松下嘉平次、加藤虎之介によつて描かれる。そして、四、五段目は秀吉の朝鮮出兵を題材にしている。ただ朝鮮出兵の素材を扱うにしても、四段目では、三韓の地図を得るため、小磯をめぐる小西と加藤とが痴話喧嘩になる展開であり、五段目は、異国での合戦の勝利後、春長親子菩提のため建立した東山大仏殿前で異国での合戦の様子を「御前あやつり」として上演する展開になっている。

本作が異国である「朝鮮」を扱った数少ない近松作品であったこともあり、日韓両国で多くの先学の関心が集まり、多角的な観点か

ら取り上げられた^①。その中で、主に五段目の「劇中劇」趣向の特殊性に注目し、舞台芸能としての人形浄瑠璃の趣向を確認する先行研究が多かった。松崎仁氏は「人形浄瑠璃の劇中劇」で、本作第五段目の「劇中劇」が「新奇な趣向として迎えられ」たと指摘したが、「ごく単純な筋で、人形劇としてまことに素朴なもの」と評価は低い^②。また原道生氏は「近松の対「異国」意識」で、近松作全体に比べて異国の場面を「劇中劇」の異質な趣向で描いたと指摘したものの、その役割や効果については述べられていない^③。さらに平田澄子氏の「享保期の近松時代浄瑠璃から」では、人形の裂く演技の指摘が加わったが、「本朝三国志」の第五段目について演劇かつ語り物としての側面を探索の考察は十分とはいえない^④。

先に結論を述べれば、『本朝三国志』第五段目は、人形浄瑠璃の中に「御前あやつり」として三巻の人形浄瑠璃を挿入した特異な体



図I 「絵尽本朝三國志」の「十二ウ・別裏見返」(『近松全集』から転載)。

裁であり、さまざまな趣向を駆使した場面である。しかし、当時の上演実態としての演出や語りについて考察することは、舞台芸能の性質である「一回性」や関連資料が残っていないという状況もあり、証明が困難である。しかしながら特殊な演出だからこそ残った資料も確かにある。本稿では、『本朝三國志』の第五段目の本文と絵尽を中心に、周辺資料を利用する。その上で舞台や人形操作、語りについて考察し、本作の第五段の演出の一端を明らかにしたい。

一 『本朝三國志』五段目の演出構成と絵尽

『本朝三國志』の五段目の構成は、異国での勝利後、大仏殿の前で行われる「御前あやつり」の直前、大仏の作り物とお伽衆の一人である「曾呂利」がその大仏の鼻から飛び出る、恐らく導入の見せ場があった。久吉と御台の登場とともに始まる三巻の「御前あやつり」、上の巻では、日本軍が高麗国へ渡り海戦を行う様子と「沐浴潜」と小西との戦いを上演する。中の巻は、日本軍に負けて北へ逃れていく大王の道行として異国言葉風もじりをふんだんに使った聞かせ場としての「大王道行」があった。下の巻では、「牧司判官」の陣へ押し寄せる小西軍の戦闘がある。そこへ、加藤が登場しその場を治めようとするが、小西は生け捕りの首耳を削ぎ、「牧司判官」を引き裂くところで、「御前あやつり」は終わり本作も大団円とな

る。

本作の本文とともに五段目の演出構成のヒントになる資料として「絵尽本朝三國志」（享保五年刊、大東急記念文庫蔵）の挿絵（二ウ・別裏見返）が挙げられる（図1）。

上中下に分けて見てみれば、上の部分では、大仏殿に観相窓があり、そこから大仏の顔が見える。墨の汚れて判別しにくいのが、大仏の鼻から傘を持った人が見える。その右側に「そろりしやかのはなよりいつる」と書き入れがある。中の部分の大仏殿の一階には「ひさよし公」「ひさよしのみだい」の観劇の様子と「三かんのゑびずたいぢのありさま」「あやつりにて小人形にてつかい申候」との書き入れもあり「御前あやつり」の実態が窺える。下の部分で、挿絵の右側に耳塚の絵があり、大仏殿の前では「御前あやつり」の三巻の内容が描かれている（その内容は後述する）。以上のような絵尽の絵柄は、本作の五段目の展開と関係性が読み取れる以上、本文と対比し検証していく必要がある。本稿では本文との関係や関連資料を中心に、五段目の展開にそって各場面を具体的に検討する。

二 舞台の大道具と「大仏の鼻」から飛び出る「曾呂利」

本作の第五段目の冒頭は、以下のように始まる。^⑤

高富朝臣久吉公ゐこくの合戦勝利を得。三韓大王日本の御下知

近松浄瑠璃『本朝三國志』第五段目の演出について

にしたかはんとの血判。（中略）此度異国の合戦上るり五段につゞらせ。滝野沢澄りやうけんぎやうのふし付。大仏のまへに人形ふたいをしつらい。あやつり役人御小姓しゆたるべしとの仰にて。御堂の左右に御棧敷をしつらい花麗をつくす御座の結構。一せいに相調ひ小西如清鞘師の曾呂利。千の利休三人は久吉公の御咄伽。（中略）曾呂利はわれくより先へ参られしか。爰元へはまだ見へられぬ。御覧なされあの塚は唐人の耳塚。扱大きい仏の。なふぢよせい。此大仏のそばではしやくしがみ、かきに見へるといふ尤。仏をみためでこなたを見れば人とは見へぬすつきり人形じや。ほんにこなたも人形じや。是はくつと笑ひける。

この箇所は、大仏の前で人形舞台の準備をする様子と、如清、利休、曾呂利の三人が「御前あやつり」のため御堂に先に入る場面である。そして右記の引用場面では、当時京都に存在した「耳塚」と「東山大仏」を登場させたことがわかる。^⑥それは、当年の朝鮮通信使を当て込み、異国趣味とともに「耳塚」からの連想で「文禄の役」を振り返る人形劇として「御前あやつり」を大仏殿の前で上演するという設定を語る箇所だからである。しかし演出の面から考えれば、大仏を実際の舞台に登場させたと思われる。それは、「仏をみためでこなたを見れば人とは見へぬすつきり人形じや」という本

文の表現から、人形浄瑠璃の舞台上での人形が、作品展開上の登場人物であることをもじりつつ、人形との対比で人形より大きい大仏を登場させたことを表している。

後堂よりさやしの曾呂利。傘一本たばこ盆引さげ仏の手の上むずと座し。なんば後生がよふても仏の手の上にねはらばふて。たばこ吞者おれ独と。所も名におふ大仏さける煙も輪をふく。

(中略) ついでに御身の内拝見。其用意いたしたと。傘ひつさげ風ぬきの御戸の内へぞ入にける。

右記の引用からは、当時大仏前に軒を連ねていたキセル屋を当て込み、「曾呂利」の人形が大仏の中へ入る仕掛けがあったことがわかる。

俄にとゞろく輿車御仏詣と呼ばれば。如清利休は気の毒声。曾呂利なふ。そろりくと呼所にそろりはそろくみくしの内。見廻りくぬつとさし出す笠のいたゞきあたまの鉢。爰はどの穴はなのあな。ハア、広しく。此はなで仏がくつさめなされたら。大仏八丁土かぜがはつとひらく傘に。どつとあてたる一はづみ。仏の鼻を吹出され。枝をはなれし桜ばな。一もみ二もみふはくく。笠をちからに身をちゞめ。だいざのまへにおり立たり。二人立よりなふくけがはなされぬか。上々もはや棧敷へお入なされた。こなたへと打つれ御前に出にける。

そして、右の引用本文の描写から、大仏の鼻の穴から、鼻を刺激されてのクシャミで、広げられた傘を持った曾呂利が飛び出ることが推測できる。大仏の鼻から飛び出る演出は、図1の大仏の顔のところに傘を持った曾呂利と、「そろりしやかのはなよりいつる」の書き入れからも見て取れる。つまり、この箇所は、大仏の鼻の穴から、曾呂利の人形が飛び出る仕掛けの舞台演出の見せ場を提供していた可能性が考えられる。

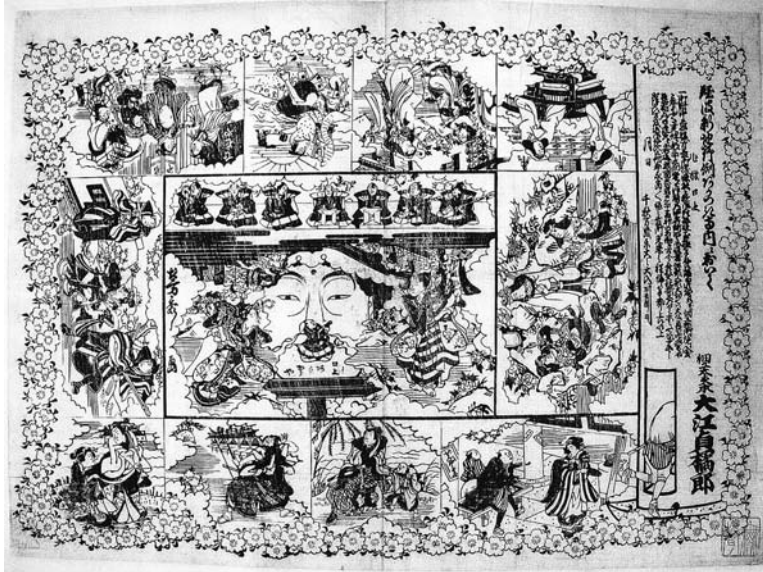
『本朝三國志』第五段目の冒頭の大仏の鼻から曾呂利が出る趣向が取り込まれていたかを確認するため、当時の近松浄瑠璃や関連諸資料を調査し、時代は下るものの、享保十一年正月、江戸市村座で上演とされる浄瑠璃『都見物左衛門』から関連事例を見付けた。『都見物左衛門』には、都の品々を当て込む詞章の中「都の辰巳耳塚の京へは遠き巽谷。聞かぬが仏大仏殿。さてさて大きなお仏様。承ればあの鼻の穴から傘さして出らる々由。さうもござらう」と大仏の鼻から飛び出る演出が『都見物左衛門』には当て込まれている^⑩。当時の都(京)の流行物の当て込みに登場したことは、上述の演技演出が人気を博していたようである。『本朝三國志』の初演と同年である享保四年六月市村座で『本朝三國志』が上演されたこともあり^⑪、歌舞伎との関連も考慮すべきであるが全く資料が残っていない。また加納克己氏の「人形浄瑠璃の地方展開」では、東海地方の諸資



図Ⅱ 天保二年三月、籠細工「天竺大人形」を描いた『観物画譜』（東洋文庫蔵）所取の一枚刷り物。

料（「天平年代記」など）から今・下切の各八幡社祭礼帳から享保十四年八月に「きようげん」の「本朝三国志」が、享保十五年には「操 三国し」が上演されたことを確認できる。

またかなり時代は下るが、見世物の資料から大道具の大仏と大仏の鼻から出る演出の関連性を見いだすことができた。それが東洋文庫蔵の『観物画譜』の見世物の一枚刷り物の二点である（図Ⅱ・Ⅲ）。「日本庶民文化史集成 第八卷 寄席・見世物」の解題によれば、一枚刷り物図Ⅱは、二代目一田庄七郎と初代門弟一田吉兵衛が天保二年三月上旬、大坂天王寺での籠細工「天竺大人形」の興行を描いたものである。一枚刷り物図Ⅲの右側に題目と口上の本文が載り、上下6コマの絵になっている。上段の真ん中が観相窓から見る大仏の顔が描かれ、その上に「大人形十八間」と書き入れがある。どれほど精密であるかの検討の余地はあるものの、大きい大仏の籠細工が登場したことは間違いない¹³⁾。周辺の絵柄も「久吉」、「利休」と「唐人」、「耳塚」が登場し、大仏絵の真下には加藤清正風の人物が海に向こう側「富士山」らしい山を見つめる、つまり異国征伐に出た加藤清正がその地で見つめる姿が描かれている。大仏絵の左側には「淀町」と書き入れがあるが、「淀殿」、つまり久吉の「御台」のことであろう。下段の「関羽」だけ本作五段目と相違すが、異国の武将として出現したと推測できる。残念ながら口上文



図Ⅲ 安政年間、大坂難波新地で大江定橋郎によるからくり・大道具の興行の『観物画譜』(東洋文庫蔵)所収の一枚刷り物。

には興行の詳細が記述されず一田の襲名の記事のみであった。以上のように見世物一枚刷り物図Ⅱは、登場人物から注目すれば『本朝三國志』の五段目を取り入れた籠細工の興行の様子を描いた資料の可能性がある。

図Ⅲは、安政年間、大坂難波新地で大江定橋郎によるからくり・大道具の興行を描いている。絵柄は双六の図式で、中央に観相窓から見える大仏の顔が描かれ、鼻の上に口上人が座り両鼻の穴から吹き出しのようなもので二人の人物を登場させる様子が描かれている。図Ⅲの右側の柱に記述された口上文には「細く人形大切では大仏鼻の穴あまからや罷出おどけ口上仕」とあり、口上人の「あまからや」が大仏の鼻の穴から出現し口上を述べたことが分かる。その大江定橋郎は、川添裕の『江戸の見世物』によれば、「上方で人形浄瑠璃の人形と、からくり人形、からくり仕掛を製作していた大江の一門」とされ、大道具として籠細工で大きな大仏の作り物を出していたと推定できる。¹⁶⁾ 以上のような『都見物左衛門』の当て込みや『観物画譜』の見世物刷り物の描写や口上の書き入れの情報で、『本朝三國志』第五段目の大仏の鼻の穴から人形が飛び出る演出の存在の可能性は確認できた。それにとどまらず後世の芸能の見世物に形を変え舞台の様子や大道具、演出が伝わっていることも明らかになった。¹⁷⁾

三 「御前あやつり」の設定と「上巻」の戦闘場面

それでは「御前あやつり」の内容から演技・演出の要素を検討する。大仏の鼻から降り立った曾呂利をもってお伽衆も揃い、御台と御世継丸も登場し、「御前あやつり」が始まる。その外題も、「男神宮皇后 五段続を三段二つ、め語申候 付り異国の鯨は小西がむしり肴」と人形浄瑠璃の外題表記形式を模している。続く「御前あやつり」の「上巻」冒頭を記す。

江遠して水数ながれ。天晴て雁転とぶ。故山千里の高麗国。遼東大王と申奉りゆ、しき帝おわします。第一の臣下李郎耶磧郎耶兄弟をめされ。扱も大日本の武将高富久吉。我国毎年の貢物おこたることを忿り。日本の兵船数万艘。釜山浦の磯近よすると聞。入たて、はかなふまじ。沐海潜汝すいれんを得たる大力の兵。かれを毒魚のかたちにつくつて海に入。大将の乗たるふねをくつ返せと。日本のてきを一のみ。かうらいちやわんのわれがちに軍の用意を船よそひ。

本作は「太閤記」を脚色したものとされるが、右に引用した本文の「高麗国」「遼東大王」は、「太閤記」に現れない。これについては朝日新聞社『近松全集』の注で、当時の認識として「高麗国」「遼東大王」が朝鮮の王を意味するとの指摘があった。¹⁹⁾ 当時の認識

近松浄瑠璃『本朝三國志』第五段目の演出について

とは一体何を指すのか。確認のため、当時の京の地誌の中で「耳塚」や「大仏」の項目に表れる朝鮮の箇所を調べた。正徳四年五月吉日、上村四郎兵衛版行『都名所軍』には、「遼唐の李子をいけどり其外討取し唐人の首を日本へ渡さん事大分なればみ、ばかりきりて異国の人数をしるして桶に入日本におくり」とあり、浅井了意作、延宝五年か六年刊行『出来齋京土産』の「遼東の李子を生捕軍兵おほくうちとり」の記事からも確認できる。これらを考えれば当時では「高麗」と「遼東の李氏」で朝鮮の王と認識していたことが分かる。ところで、第一の臣下「李郎耶磧郎耶兄弟」の名は、「太閤記」巻十五に明の將軍として現れ、以後朝鮮軍記物へ伝わるため、本作と『太閤記』との直接的な関連性は確認できない。²⁰⁾

問題は、「太閤記」を含む朝鮮軍記にも現れない「沐海潜」である。崔官氏は韓国語の論文で、「沐海潜」の描写が京で刊行された『懲愆録』の朝鮮水軍「亀甲船」の描写と類似を指摘し「沐海潜」が「亀甲船」の脚色であるとの推測は示唆に富む。近年の朝鮮軍記物の研究からも、李舜臣の記事は朝鮮の『懲愆録』の刊行から宝永期の『朝鮮太平記』（宝永二年刊）や『朝鮮軍記大全』（宝永二年刊）に受け継がれた時期でもあった。つまり固有名詞は用いないが、当時の朝鮮軍記物の影響で「亀甲船」を意識し脚色に用いた可能性は指摘できよう。ならば「沐海潜」の登場に近松なりの工夫を加え

たに違いない。本文では「沐浴潜汝すいれんを得たる大力の兵。かれを毒魚のかたちにつくつて海に入。大将の乗たるふねをくつ返せ」と王に命じられ出陣し、「風も吹ぬに海上さかまき一丈あまりのしやちほこ頭れ。劍のひれをふり上」ながら「沐浴潜」が登場する。つまり朝鮮の將軍が「毒魚のかたち」に変じて攻撃する見せ場があった。それにあたっては小西が「大手をのべてかいつかみ舟はたに引あくれば。皮はすつほりこうらいしん。沐浴潜といふ者あますまじいと切てかゝる。かいくゞつて引つかみ。ぶえんのしやちほこまなばしいらすの手料理と。首をふつゝとねぢ切。ゐこくのしやちほこ取」る、つまり小西の勝利で、上之巻は終わるのである。この箇所は、図1の絵尺の絵柄には、船の前の武將が魚類の怪物のような「沐浴潜」を退治している場面が描かれている。ところが「毒魚のかたちをつくつて」攻撃はするものの、小西の手により引き上げられ皮を「すつほり」脱がされるなど小西には叶わない。実際の人形の演出においても、「しやちほこ」から「こうらいじん」の武將を現せるところが見せ場であつたらう。

要するに「御前あやつり」上巻は、絵画資料と本文から見れば、怪物に見立てた「毒魚」の形の「高麗」武者の人形と小西の人形とが戦いを見せる場面であつた。

四 「中之巻」「大王道行」の異国言葉もじりの語り

「御前あやつり」の「中之巻」は、日本軍に破れ、北へ落ち延びてゆく「大王道行」であり、語りの聞かせ場である。では、異国王の異国での道行には、近松がいかなる工夫を凝らしているか考察してみる。本作全体の注釈はないものの、「大王道行」は、『近松語彙』や朝日新聞社『近松全集』に一部の注が載つてはいる。²⁵だが、未だ意味不明な箇所を多く含む難解な箇所で、朝鮮の地名やそれらしきものをちりばめ、異国言葉もじりの多い道行である。両注では、「でたらめ」な異国語もじりであるとしているが、いかなるもじりであるか考察が必要である。まず冒頭箇所「鳥の跡文字にかゝねば。詞には。聞わけがたく聞しらず」では、異国王の道行らしく異国言葉で語る箇所であると暗示している表現から「道行」は始まるのである。続く「大王はべるあんどどうを立出て。あぼすとうげの夜るの道。」では、下線の「べるあんどどう」は「平安道」を表すが「あぼすとうげ」は未知な地名である。「あぼすとうげ」以外に道行に表れる「ひすなんざん」、「こんさんちや」は、朝鮮や明の地名で見付けられないが、外国の地名風にした近松の創作ではなからうか。また「雲にさはさすあまをぶね。れんのくゝと引あみのめにもたまらぬ。てれめんす。是から鳥の事とへば。こたへもなみのしらはまに

ねむる。かもめや。ふにす鳥。なれもいづくをやどりとや」の「てれめんす」「ふにす鳥」については、朝日新聞社『近松全集』²⁵の注で「てれめんす」を「手練を丁列綿油と混じて外国語に擬せしものならん」と、「ふにす鳥」を「伏す鳥をわざとフニスと変へて異国の鳥名らしく変ひしならん」としている。しかし『増補華夷通商考』（宝永五年板）²⁷で、「アラビヤ（中略）此国にフニスと云鳥あり。寿命四五百歳なり。自ら死する事を知て、（中略）炎天の時を待て尾を揺して火を燃し自ら焼死す。此鳥此国に只一鳥之れ有り。死するときは又一鳥生ず。此故に国の諺に、人物奇異にして二つの無きのをフニスと云」とある。また同書の「阿蘭陀」国の箇所で「土産油類 アゼトウナ、ハルナメ、テレメンテイナ、丁子の油、琥珀油の類此外色々」と確認できる。つまり異国言葉もじりて『増補華夷通商考』の利用の可能性がある。しかしこの道行は未だ多くの意味不明な箇所が残る。

本稿で注目したのは「大王道行」の漢詩箇所「風既来。雨既来。君音信不来。花開愁不開。泪滴東祥海」である。この箇所は、本文に、「ほんちやんのらいひちやんのらいきいちんこふうらいはかいてめんふうかいよてへまんことんやんのはい」と仮名が付されている。この漢詩の読みは設定を考慮し朝鮮の漢詩読みで語ったのだろうか。それ以前に漢詩の唐音との比較をするため、『唐話辞書

類集』から当時の唐音から漢詩箇所の読みを再現してみれば、「フキイライウイキイライキユインスインプライホアカイチウブカイ■マントウツヤンハアイ」である。そして伊藤東涯の『朝鮮国諺文字字母反切二十七字』や雨森芳洲による朝鮮語辞書である『全一道人』等を参考に漢詩箇所の読みを当時の諺文の音から再現してみれば、「フンギレイウギレイクランシンブルレイフハカイスウブルカイ ルマントンヤンヘイ」となる。比較してみれば、当時の唐音とも当時の朝鮮語諺文とも一致せず、日本の漢字音読みに近いことがわかる。しかし付された仮名の傍線を引いた箇所のように音を変化させるか無い音（「の」、「よ」）を挿入した方法をとっていることがわかる。近松が朝鮮の漢詩についてどれほど熟知していたかは不明であるが、朝鮮の漢詩訓読の特徴として挙げられるのが「吐」（口訣字とも）²⁸である。「吐」とは、朝鮮漢詩の訓読で、意味の切れ目に入れる助詞として、「エ」（日本語の「の」）「イ」「イニ」「ヨ」「イニラ」等を付けて詠むことである。断言はできないが、上述の「沐海潜」の描写に朝鮮軍記物からの影響が考えられるならば、近松が朝鮮に興味を持っており、朝鮮の漢詩訓読の特徴を知り、語りにそれを反映し趣向として取り入れた可能性があったのではなからうか。それに比べ、同時代の他浄瑠璃や歌舞伎での異国言葉もじりの用例をみれば、『大職冠』第二段目（正徳元年（一七一））竹本

座初演)では意味不明な唐音言葉があり、『国性爺合戦』の第二段目(正徳五年(一七一五)竹本座初演)の唐音もじりは評判を得、歌舞伎でも同趣向の上演が確認できる。その上、歌舞伎『仏母摩耶山開帳』第一(元禄六年(一六九三)万太夫座)では、でたらめな朝鮮語もじりがある。つまり同時の異国言葉もじりは、でたらめで意味不明な異国言葉もじりであった。

以上の異国言葉もじりの検討からもわかるように、本作五段目「大王道行」の異国言葉もじりは漢詩の形を利用した特殊な趣向と認められる。つまり『本朝三國志』第五段目の「中之巻」「大王道行」は、朝鮮語風の異国語のもじりをふんだんに使った「高麗王」の道行であった。絵尽の図1では、「中之巻」らしきところ、「高麗王」と臣下らしき四人が描かれているが、実際の人形の動きや演出は検討ができない。本稿で検討した漢詩風のもじりも検討の余地もあり、異国言葉もじりをも合わせて考察することを今後の課題にしたい。

五 「下之巻」人形を「ひきさく」演出の見せ場

「御前あやつり」の「下之巻」について見ていく。「下之巻」では、木梅と小西の戦闘から牧司判官と小西の戦闘へ続き、そこへ加藤が遼東大王を生け捕りにして現れ、その場を押さえる展開になってい

る。戦闘場面も人形操りの見せ場であったと思うが、「いけどりぶんどり」として首と耳を削ぎ、牧司判官を引き裂く「御前あやつり」の結末が注目を引く。

かたうこにしもくそがりやうそく両方へ引はつて。ヤアゑいくふたつにさつとうなぎをさくよりやすかりけり。御さんじきより久吉公あふきを上。ヲ、めでたいくできたくはへくと御説有。

この場面は、絵尽では耳を削ぐ絵柄はあるものの牧司判官を引き裂く様子は描かれておらず、この箇所が論じられることはなかった。しかし先述した平田の論考で、「人形の足を裂いたりする演技」が古く金平浄瑠璃からあり当時の例として『国性爺合戦』の五段目の「三方から引き裂く」例をはじめ取り上げた。「下之巻」本文では、「両方へ引はつて。ヤアゑいくふたつにさつ」と両方から人形の足を「うなぎをさくよりやすく裂く場面として見せたはずである。このような人形操りの演出は、先行研究の指摘だけでなく、多くの用例がある。近松作の中でも、『以呂波物語』の第五段目に、「やしやじん」が熊丸を「ひつつかんで両足とつてさつとさき」という本文と、同作の異本東京大学図書館蔵の絵人細字本の挿絵に両足を引き裂く様子が描かれていることが確認できる³³⁾。また、古浄瑠璃『日本蓬萊山』や『牛若千人切付タリ牛玉姫』の挿絵や、近松作

『天神記』の五段目の終わりに「両あしつかんで。二つにさつとつかみさき」⁵⁵などからも、「下之巻」の牧司判官の両足を引つ張り引き裂く場面が、こうした人形演出の踏襲として、ひとつの見せ場として機能しているといえる。

六 「劇中劇」と人形の趣向

最後に劇中劇全体の人形の操作はいかなるものだったのかについて考える。劇中劇の人形操作の論点は、人形が人形を遣ったかどうかと、実際の人形遣いが登場人物になり人形を遣うかどうかである。前者の場合、本作の演技・演出についてはないが当時の人形の遣い方からすれば、人形が人形を遣うことは可能とみた祐田善雄氏の『曾根崎心中』と辰松の手妻人形」論稿から顧みる余地はあろう。⁵⁶

元禄から享保まで活躍した辰松八郎兵衛の変化する人形の手妻芸の技巧の解説で紹介した『和漢三才図会』の山本飛騨掾の記述で、引き線（仕掛け糸）を「用いるあやつりで、碁盤の上で人形に人形を舞わせることができた」という記事と合わせ、『大内水上御遊』（元禄十六年）の「三つ人形片手づかい」の遣い方が「人形が人形を遣う仕掛けになっていた」と推測した。それに対して松崎仁の先述の論考では、人形劇中の人形劇という同趣向の例として『源義経将基経』（竹本座、正徳元年正月上演推定）の第一を挙げ、「演技と現実

との混同のおかしみが生じている」と評し、人形劇中の人形劇に注目した。ただ氏は「人形劇中の人形劇だからといって、人形が小人形を操る演出が行われたとは考えられない」としながらも、『金屋金五郎後日雛形』（宝永二年、豊竹座）の「小さん」の述懐の所作では「人形を手を持ち、これを操りながら演出されたと考ええる」ことや当時の巧緻な手妻人形の発達から肯定的と見た。しかし『本朝三国志』については、「やはり人形が人形を操るというイメージが劇場の観客になくは、この趣向はあまり意味がない」と本文しか手がかりはないが、人形が人形を操ることがあったとみた。

現時点では、資料不足でどちらかに確定しにくいのが現状である。ただし五段目冒頭の「大仏のまへに人形ふたいをしつらい。あやつり役人御小姓しゆたるとの仰にて。御堂の左右に御棧敷をしつらい花麗をつくす御座の結構、「御前あやつり」が始まる前の様子として「手すりぶたいを組立てる其役々の御小姓しゆ。役付の人形手ごとにて持てがく屋入」、「御前あやつり」終了直後の描写「手んに人形さしあげて御まへにかしこまる。こうらい日本一時に見るなりきくなり上るりあやつりこれ。おさまれる」は、示唆するところが大きい。同じ「入子型」の「劇中劇」である『源義経将基経』にはほぼ描写がないことから、『本朝三国志』の第五段目は人形浄瑠璃の舞台や人形操作に関する描写として看過できない。それに、絵尽の

「小人形にてつかい申候」の書き入れも合わせて考えれば、イメー
ジだけではなく普段の人形浄瑠璃の操り人形がそれより小さい人形
を遣ったことと考えられるため、やはり人形が人形を遣って上演し
たと推測したい。また本作五段目は人形操作だけではなく、当時の
人形浄瑠璃の舞台裏を覗くことのできる表現が含まれていることも
注目できる。

おわりに

本稿は、『本朝三國志』の第五段目の詳細を、人形浄瑠璃という
舞台芸能として舞台や人形、演出、そして語り物の特徴から探る試
みであった。考察した五段目の詳細は、導入の舞台演出の見せ場と
して、大仏という大道具とその大仏の鼻から人形が飛び出る演出の
可能性を指摘できた。上巻では架空であろう「沐浴潜」という特殊
な人形を小西の人形と戦わせる見せ場として設ける工夫をした。ま
た中之巻の「大王道行」は、朝鮮語風の異国言葉もじりを多く用い
た高麗王の道行であり、特殊な趣向の漢詩風のもじりがあった。そ
して下之巻の牧司判官を引き裂くことで、最後の大団円に以前から
の常套演出であった人形を引き裂く演出として見せ場を設けた。つ
まり恒例の演出を駆使したのである。

以上の考察からも、『本朝三國志』の第五段目は、語りや人形、

舞台を見せるため、つまり見せ場・聞かせ場のために作られたとい
える。しかし本稿で扱えなかった節をも合わせて考察する必要もあ
ろう。異国言葉もじりの考察をも含め今後の課題にしたい。
最後に本文引用箇所では差別的表現が含まれているが、原文のまま
に掲載したことをお断りしておく。

注

- ① 本稿で取り扱った論考以外、主に金光哲『中近世における朝鮮観の創
出』（校倉書房、一九九九年）、崔官「江戸時代に現われる壬辰倭乱—
木曾官の変容をめぐって—」（『比較文学研究』六十二巻、一九九二年
十二月）、須田努「江戸時代 民衆の朝鮮・朝鮮人観—浄瑠璃・歌舞
伎というメディアを通じて—」（『思想』「韓国併合」100年を問
う」、二〇一〇年一月）が挙げられる。これらは当時日本庶民の朝鮮観
を抽出する材料として『本朝三國志』を含む文芸作品を扱った。しかし、
観客論や当時の庶民の朝鮮観を考える際、どういった媒体でどう表現され
ていたかを考察することが、享受者へ伝わる経路や方法を探ることが不
可欠の作業と判断した。そのため、本稿では朝鮮観については触れない
ことを断っておく。
- ② 松崎仁「人形浄瑠璃の劇中劇—元禄・宝永期を中心に—」（『立教
大学日本文学』八号、一九七二年六月）。
- ③ 原道生「近松の対「異国」意識」（『国文学 解釈と教材研究』「江戸
の劇空間—比較演劇の視点」、二〇〇〇年二月）。
- ④ 平田澄子「享保期の近松時代浄瑠璃から—世界の広がり・混沌・や
さしさ—」（『岩波文学』特集 人形浄瑠璃・文楽のことばへ」、二〇

一一年三・四月)。

⑤ 本稿の『本朝三國志』のすべての引用は『近松全集 第十一卷』(岩波書店、一九八九年八月)による。引用に際して節章は省略し、適宜、清濁点・句読点を私に付す。そして傍線は引用者によるものである。

⑥ 『国史大辞典』(吉川弘文館、一九七九年)によれば、現在の耳塚は京都市の豊国神社の近辺にあり、当時方広寺の門前にあつたとされる。五段目冒頭に登場する「るしやな仏」(毘盧遮那仏)は、現在は消失された方広寺の御堂であり、「東山大仏」を表す。

⑦ 『正本近松全集』(勉誠社、一九七七年)の解説、『近松全集』(岩波書店)の解説等。

⑧ 田中富吉著『続・日本のたばこ——歴史と文化——』(たばこ総合研究センター、一九九六年)

「寛文(一六六一〜七二)ごろから京都の町にはキセル店が多く、「問之町(あいのまち) 通二乗下るきせるや町この町東西両側ながらきせるを張りて世を渡るを業とす」と《京雀》にあり五条に近い方広寺大弘殿の前にもキセル屋が多くあつて、大仏前のキセルだから大仏キセルと名付けたのが、いつしか宣伝に使われたのだろう。」

⑨ 『近松全集』(岩波書店)をはじめ、横山重編『古浄瑠璃正本集』(角川書店、一九六四年)、古浄瑠璃正本集刊行会編『古浄瑠璃正本集』(大学堂書店、一九八九年)、古浄瑠璃正本集刊行会編『竹本義太夫浄瑠璃正本集』(小学堂書店、一九九五年)、信多純一編『赤木文庫古浄瑠璃稀本集 影印と解題』(八木書店、一九九五年)など。

⑩ 土田衛の「歌舞伎年表 補訂考証享保編其三(享保七〜十一年)」(演劇研究会会報 第三十二号、二〇〇六年五月)で「享保十一年正月一六日、市村座、春狂言「鶏奥州源氏。浄瑠璃「都見物左衛門」「ねびきのかどまつ」(一中)。太夫(都一中、都千車) 三味線(都千弥)と

ある。『都見物左衛門』の本文は『日本名著全集 歌謡音曲集』(日本名著全集刊行会、一九二九年)による。

⑪ 土田衛「歌舞伎年表 補訂考証 享保編其二(享保三〜六年)」(演劇研究会会報 第三十一号、二〇〇五年)。

⑫ 加納克己「人形浄瑠璃の地方展開——東海地方を中心とした地採りの歴史——」(神戸女子大学古典芸能研究センター紀要) 5号、二〇一二年三月)。

⑬ 芸能史研究会編『日本庶民文化史集成 第八卷 寄席・見世物』(三一書房、一九七六年)。

⑭ 川添裕氏の『江戸の見世物』(岩波文庫、二〇〇〇年)では、一田庄七郎は、文政年間、浅草奥山にて巨大見世物小屋を持ち、「江戸における細工見世物のブームのきっかけ」をつくった存在であったことが述べられている。

⑮ 注⑭に同じ。

⑯ 『撰陽観物画譜』(西尾市岩瀬文庫蔵)にも、安政年間、大坂難波新地で大江定橋郎によるからくり・大道具の興行を描いた同様の一枚刷り物が所蔵されている。「あまからや」の書き入れの位置以外は、同様である。

⑰ その他のジャンルである小咄・落語にも影響があつたことが窺える。早くは天明五年江戸板『猫に小判』(『江戸小咄本』(金竜堂書店、一九二九年))所収の小咄「大仏」があり、落語「鹿政談」の挿入話にある奈良大仏の鼻の穴を傘差して通れるか賭けをする小咄などを挙げる事ができる。

⑱ 『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八三年)。

⑲ 藤井乙男校注『近松全集 第十一卷』(朝日新聞社、一九二五年)。

⑳ 『新修京都叢書』(臨川書店、一九六七年)の第五卷五〇〇頁。傍線は

引用者による。

- ⑲ 注⑳と同じ。十卷五三九頁。
- ⑳ 檜谷昭彦・江本裕校注『新日本古典文学大系六〇 太閤記』（岩波書店、一九九六年）の注によれば、「明の大將は宋応昌と李如松。この二將の名の出所未詳」とされている。
- ㉑ 崔官「近松門左衛門の『本朝三國志』に関する一考察」（『日本文化学報』第三輯、一九九七年五月）。
- ㉒ 金時徳「近世文学と『懲惑録』——朝鮮軍記物（壬辰倭乱作品群）とその周辺」（『近世文芸』八十八号、二〇〇八年七月）、崔官「壬辰倭乱（文祿の役）と日本近世文学」（『アジア遊学』163日本近世文学と朝鮮（勉誠出版、二〇一三年五月）など。
- ㉓ 上田萬年・樋口慶千代著『近松語彙 復刻版』（富山房、一九七六年）の語注と、藤井紫影校注『近松全集』（大阪朝日新聞社、大正一四〜昭和三〇（復刻） 思文閣、昭和五三）の頭注。
- ㉔ 注㉓と同じ。
- ㉕ 『日本水土考・水土解辨・増補華夷通商考』（岩波書店、昭和十九年）。
- ㉖ 『唐話辞書類集』（古典研究会、一九六九〜一九七六）から、当時の「唐音」を再現すると、次のようである。■は不明・調査できない字の音である。
- ㉗ 『朝鮮国諺文字母反切二十七字』（伊藤東涯著、一七〇四年成）京大本、『全一道人の研究』（京都大学国文学会、一九六四年）、『和漢三才図会』（寺島良安著、一七二二年脱稿）、『捷解新語』（京都大学国文学会、一九五七年）を参照した。
- ㉘ 金文京著『漢文と東アジア訓読の文化圏』（岩波文庫、二〇一〇年）。
- ㉙ 享保二年正月刊『役者色茶湯』の瀬川菊之条の評（『歌舞伎評判記集成第一期第六卷』（岩波書店、一九七二年）、「顔みせ瀬川殿はせんだん
- 女、唐船二のり和藤内をまねき、日本人く、なむきやらちよんのふとらやあくの唐音でけました」。下線は引用者によるものである。
- ⑳ 注㉑と同じ。
- ㉒ 『近松全集 十三卷』（岩波書店）の「以呂波物語」の第五段目。
- ㉓ 『日本蓬萊山』（『古浄瑠璃正本集 角太夫編第三卷』（大学堂書店、一九八九年））、『牛若千人切付タリ牛王姫』（『古浄瑠璃正本集 加賀掾編第一卷』（大学堂書店、一九八九年））の第九・十回。
- ㉔ 『近松全集 八卷』（岩波書店）。
- ㉕ 祐田善雄「曾根崎心中」と辰松の手妻人形」（『山辺道』六号、一九六〇年。後に『浄瑠璃史論考』（中央公論社、一九七五年）に収録）。
- ㉖ 注㉗と同じ。
- 〔付記〕 本稿は日本近世文学会平成二十三年度秋期大会（於高麗大学校）の口頭発表に基づき加筆したものである。貴重な御教示を賜りました諸先生方に深く感謝申し上げます。また資料の閲覧及び図掲載をご許可下さった東洋文庫には、末筆ながら深謝申し上げます。なお、本校は、平成二十三年度平和中島財団「外国人留学生奨学金」による成果の一部である。